がっちり握った 職場の主導権

就労後の感想語る組合員

十二月一日の一せい就労からはやくも十一日がたった。われわれは就労に際して固い決意と申合せを誓いあって、それぞれの職場に入っていったのであるが、各現場ともわずか十二日の間に、職場の主導権はわれわれがガッチリとにぎっている。まだわずかの日数だが、その間の感想を組合員から語ってもらった。

こっそりき章を剝ぐ第二組合員

四山　坑外組合員

第二組合員との間にトゲトゲしいような激しい対立はないが、生産再開で就労したときは、現場は足の踏み場もないほどの荒れようだった。

われわれは早速、職制に「保安上からも悪い、仕事の能率から上がらない処置すべきだ」と申入れ、これが受入れられてその日は整理作業になったほどだった。

第二の連中は第一日は挨拶もしなかったが、二日目からは話し出してきた。変切って所まなかったという気持ちからか、帽子につけている新労の印をハギちぎっている者を見たし、五人ほど剝いでしまっている。

いままで職場でつくっていた会議をいま脱落者が出たので、二分するかいままで通り一本にするかで問題になっている。

人数からいえばこちらが少いのだが、仕事上の主だった人たちがほとんどこちらにいるため、彼らとしても二分したくない気持ちでいままで通りしてくれといってきたので、われわれとしては、三月までは当分このままにしておく、それまでお前たちが復帰してこなければ二分すると申渡している。

とにかくこちらの方はどこも元気がよく朗らかである。

帰りたいという第二組合員も出ている

四山　坑内運搬組合員

就労にあたり鉱長の訓辞があったが相当威圧的なことをいっておった。坑内ではわれわれにたいする圧迫があるものと当然覚悟していたが、うちの分会では先手を打って係長、係員の方に私が面会をして、差別をさせないよう談じて就労した。

運搬では重要な個所はほとんど第二組合の連中をおいていたことは他の職場と変りはなかった。そういう所へわれわれが一斉就労してきたので、未熟な第二の連中は早くも仕事に混乱をおこし、仕事ができない。結局以前のような形にもどすことができた。われわれの方から「お前のような者がいても仕事にならん。おりたかったら積極的に仕事を覚えろ」とハッパをかける始末だった。

だいたい運搬はわれわれの側が人数も多い、ベテランばかりだから現場での主導権は完全にこちらがにぎっている。鉱長は訓辞で相当強いことをいっていたが、現場の作業状態はそうはいかない。そらしなければ、現場での生産の実績が上らないことを職制自体が知っているのだ。

第二組合員の動きは、こちらがあまりものをいわないので、知って向うの方から言葉をかけたげな恰好をしている。何じろ連中は仕事が判れないので、どうしてもわれわれの方に言葉をかけなければならない状態におかれているありさまである。

職制は二つも高圧的ではなく低姿勢だが、しかし上からいわれていることは必死になってせっせとしている。

一つの例だが、職制の責任で人車が遅れたことがあった。もっとも運転する人間も判れない第二だからかえって悪かった。当然、昇坑が遅れ残業となる。以前なら係長が何かいっても、職制の責任で遅らしたのだから、係員が強引に係長がブツブツいっても残業にしていたが、いまはそれがいえない状態になっており、ハッキリした理由がなければならない。その理由をいいたくないばかりに、結局組合員に頼みこんで残業取扱いは許してもらい、そのかわり自分がその額に見合う金額を身銭を切って払う約束をしている。

第二組合員たちは仕事上の苦情など組合の方にもって行かず、われわれの方にもってくる者が多い状態が出ているありさまだし、組合の組織に復帰したいと言い出してきている第二組合員もある。

われわれとしては、今しばらくはじっとしていて、大体落着いたらこちらから説得に行くべきではないかと話し合っている。

とにかく、絶対仕事だけはお前らに負けないぞ、主導権は握っているのだという気概をわれわれは一人ひとりもっており、運搬はとくにわれわれが有勢な地位にある職員の会社に対する態度は、非常に卑屈になっているのが目立つ

攻勢の時期も必要

本所　事務所組合員

一般的にいえることは職員たちがとても低姿勢だということである。就労して、課長が挨拶した言葉のなかに「いままでは一応大目にみていたが、これからは第一第二とも同一にやっていく」と、高姿勢になるかと思うと「だがそう固苦しくならないでください」などとかならず何か逃げみちをつくることを忘れない。

われわれのほうから「そういうことはわかっている。すでに中央協定できまったことだし、組合からも話があった」といいだすと「そう結論をいわれると私のいうことがなくなる」と二ガ笑いしていた。

第二組合員はぜんぜん低姿勢であり、われわれの前では一言も組合の話はしないように神経を働らかせている。

職制のまえではビリビリしている。職制のほうでは別に何もいわないが、彼らはいわれなくとも仕事をしている。ということは、職制がいわなくとも〃いうことをきく〃ようになっているということである。いままでズボラだった奴が、例えば仕事中でもぬけだして外出していたなどという奴が身動きもしないようになっているのにはおそれいってしまった。これは、会社と第二組合のほうからよほど何かいわれているのだろうと思う。

人数はすくないが、組合員はとても各職場とも元気いっぱいではあるがらかだ。女の人たちも非常に元気である。こんどは、当分このヴヤムヤの形のままでいくと思うがいまのような状態では第二の連中がわれわれの組織に帰ってくるとは思われないようだし、われわれもそう簡単には思っていない。

いままでのこちらの構えを、いろんな形でこんど通していくことが必要だし、第二の連中よりもわれわれのほうが有利だという段階までいくように努力することが必要だと思う。

ヤマのほうで第二の連中が組織に帰ってくるようにならなければ本所ではそう容易に帰ってはこないだろう。われわれのほうは、いまは低姿勢だが、何かの機会に攻勢にいつせいに移ることは考えなければならないと思う。だが、いずれにしても説得活動はつづけなければならないことは当然である。

まだ、いまの段階では説得の時期ではないが、もうすこし落ちついたら、さっそくはじめなければならないと思っている。

ペコペコする第二組合員

本所　事務所組合員

ほとんどが職員と第二組合員であり就労する前は多少不安に思いながら就労したが、本所とくに本館には約一割ほどの組合員がおりこの仲間たちと昼休みには愉快に話し合っているので、心配は全然ない。

三百数十日たたかってきたから労働者としての誇りがいまでは身にしみており、彼らに対しては全然ひけ目を感じぬようになっている。バッジも堂々とつけ胸を張っている。第二組合の連中がペコペコして、われわれにわざわざ腰掛をふりまいているのも可哀想である。

仕事の面では別にどうということもないが、いまから正月にかけて酒をのむ機会が多くなると思われるので、その機会をとらえて職員や第二組合の方から脱落の説得に来ることがあろうと覚悟している。だが、労働者の誇りと友情はどんなことがあっても捨てられない。われわれの方は人数は少なくてもみんな元気であり、完全に圧倒している。

相手をのんでいる

港務　運輸組合員

いまのところとくにひどい差別問題は表面には出ていない。

第二組合員は、われわれが現場に帰ってくるというので相当以上に警戒していたようであるが、意外に温和しいので安心しているようである。

職制はいちいち特休のこと、交替時間などのことを作業指示としていってくるが、それに対してこちらは別に卑屈にならず対処している。

数からいえば第二組合よりわれわれの方が少ないが、われわれがいなければ仕事にならないという自信を各人がもっており、団結をさらに固め、そのうちに第二組合員を引張りこむという気構えを示している。現場に入る前からすでに相手をのんでいる構えがあったので、現場に帰ったその日から生産の面でも、職場のふん囲気の中でも主導権を握っている。

一般の第二組合員は緊切って所まなかったという気持からか、われわれに対して好意的な態度でのそんでいるし、第二組合の幹部に対しては非常に不信感をもっているようである。だが特定の人間はかたくなに対立をもった気持ちでわれわれに対している。

われわれと第二組合員の間には感情的なシコリが相当あるが、一部の人間を除けば、組織を一挙に合わせるということは仲々困難だが、共通の要求に対しては行動面での統一は案外はやくできるような気がする。

無気力な職場の空気

港務　事務所組合員

就労のまず最初に課長が説教した説教の内容も皮肉にチクリチクリといってきたり、また自分はお互いに人間としてこういうことをいうのだと、人間をもってきたりイヤ味をいうかと思うと、もの静かにいうなど、まずそういうことがあった。

自分のところは組合員はたった私ひとりという職場である。あとは課長、課長代理、係長、職員と第二組合員ばかりだ。

以前と職場の空気がガラリと変わり冗談ひとつや大きな笑い声もあまりおこらず、シーンとしている。どにかくほがらかなことがぜんぜんなくなっている。

とくに可哀そうなのは第二の女子組合員だ。いぜんは朝早めに出ていたので昼食も早めにとり、お茶をくばり、キッチリ昼の休憩をしていたのが、そういうことをしなくなったため、昼休みもとても、すくなくなっている。

仕事面では変なイヤがらせなどはほとんどない。変なことをいってくれば直接課長のほうにもっていき、逆に仕事の面でこちらから指摘されて、その誤りを課長からとがめられている職員さえいる。

職場内での第二組合員の考えかたとしては、目先きのことで抵抗しても職場を失なうことになるから、長いものにはまかれろという非常に消極的な考えで、われわれのためには第二組合がいいのだ、第二組合が悪いのだなどという組合を中心においた考えとは遠く離れた考えしかないようで、組合というものを真剣にみていないようである。逆に、会社の生産計画でも第二組合に入っている、事務所関係だから安心して働けるという感覚しかもたないようである。

こんど必ず会社から鉄ツイがくだされる時期がくると思うし、現場を合理化して事務所を合理化しないとはとても考えられない。合理化がある場合は、抵抗の弱い彼らはおそらく雷たたきでへらされていく時がくるということが、いまの状態では考えられる。

また、とくに上席係員などがこのごろ港務所分離問題をほのめかして、会社のいう理屈をさも自分の考えのようにのべている。

職場における第二組合員はほとんど黙りこくって、私にたいしては何ひとつとしていうことができないありさまである。

職員のなかでも比較的心のあるものは「職組をもうすこししっかりしてもらわんとためになってしまう。われわれは会社に協力したんだから、要求すべき点はどしどし要求しなければ」と組合の骨ぬきになった姿にふんまんをもらしているものも出ている。

労働者としての正しさ貫くこと

宮浦　機械工（三交替）

とにかくひどい差別である。重要な個所、よい個所は第二組合で占めている。職制は〃輪番制は廃止になっている〃とか、〃第一の者は作業になれていないから〃とかいう口実でこのような差別をおしつけてきている。

作業量も、ものすごく増えている。不当な差別と職制支配による労働強化のおしつけがひどく、感情的には耐えがたいものがあるが感情的な反発だけで問題の解決にならないことはみんなよく知っている。今後の職制の出方や第二組合の行動を十分みて、執行部の指示をうけながら、分会全体の意志で対処しなければならない。そのためのメチ運動をやっている。

つらいことばかりだが、われわれはあくまでも労働者としての正しさを貫ぬくためがんばらねばならない。生産の主導権も、職場の主導権もわれわれにあるのだからわれわれが正しい運動をすすめていけば、裏切った第二組合員も動かすことができると思う。

主導権はこっちに

三川　二十四昇採炭組合員

就労して感じたことは第二組合員たちは異常なまでに自己本位なことである。係員に顔つくりばかりして、自分を高く評価して貰おうという気持が旺盛である。

休憩時間になると自分だけ出ていって休憩したり、ふりかえ休憩（一時間）のときは係員がいないときは一時間半も休憩したりしている。こういうふうで個人プレー

あれから一年（3）

焼きつくした首切り勧告状

十一日に指名解雇を強行

十二月八日、冬晴れである。二日から五日にかけて会社が郵送した不当首切り勧告状をひとまとめにして、会社にたたき返した日だ。この朝、各地域から本社目指して怒りのウズがせきを切ったように四方からおし寄せてきた。「業務阻害者」というありもしない言いがかりをつけて、組合員の中核となってたたかってきた仲間を、職場から追っ払おうとする悪質な会社の組合ふっつぶしに、怒りにコブシをふるわし、まなじりを決じめにじてタルづめにし、栗木幹や若林所長、各鉱長あての大きな封書のプラカードをつくって、会場につめかけていた。

組合代表の誠意をつくした会見申入れにも会社幹部はまったくのナシのツブテだった。待ちわびる組合員、主婦の前に報告に立った書記長は「敵の挑発を默殺し、いまからこの勧告状を山の上で焼きすてて、みんなの怒りを腰ぬけ経営者にぶつけてやるため、栗木社長、若林所長、坑長らへの退陣勧告を先頭に、いまから、全員、山の上クラブに向って進撃する」という報告とともに、デモ隊は怒然と山の上クラブ向けて進撃しはじめた。

クラブ前では到着した支部ごとにつぎつぎと激しいデモが展開され無能経営者退陣勧告を要求する大封筒のプラカードが火の中へ投げこまれる。指名退職勧告状をつめこんだ〃千両箱〃も焔の中でたちまち焼きつくされてしまう。みいけの火が燃えあがった。この火は今日を契機として国のすみずみまで広がりはじめたのである。

組合では翌九日、臨時総会を午前九時から市民会館でひらいた。大会では製作所脱落を主導した竹原進也外十一名とともに、会社の一方的な希望退職募集に応じて、闘争に重大な影響をあたえた峯佐義男外一〇三名の除名を決定するとともに、今後激化するたたかいに対して、全員が団結一致でガンバル決意をつよく固めた。同時に大会は宣言を発し、あくまで不当首切りをはね返したたかいぬくことを宣言した。

一方、安保のたたかいも急ピッチにもり上がり、十日には全国第九次統一行動に発展、大牟田地区では午後五時から一万五千名が笹林公園に結集して「安保改定阻止、炭労首切り反対、失業反対大牟田地区総決起大会」をひらき、大会後は三隊に分れて松明デモを敢行した。

退職勧告状が返上されてから三日後の十一日、会社は勧告状返上にあわておのの、がむしゃらにも、ついに〃指名解雇〃の拳に出てきた。その数は一、二七七名である。

首切り状をうけた組合員の二主婦は、このときの心境を詩の中にこうつづっていた。

……きっと夫の首は切ってみせます。一粒の米がつきても、一円の金がなくとも、夫の首は切らせません。……